



大五郎は天使のはねをつけた

大谷 淳子

N. D. C. 913 大五郎は天使のはねをつけた

大谷 淳子 文
大谷 英之 写真

旺文社 1980

126p. 22 cm (人間と動物♡愛のシリーズ)

小学中級以上

(人間と動物♡愛のシリーズ)

大五郎は天使のはねをつけた

1980年 8月15日 初版印刷

(乱丁・落丁本はお取りかえします)
(ので本社に直接お申し出ください)

1980年 8月25日 初版発行

文 大 谷 淳 子
写 真 大 谷 英 之
発 行 者 立 澤 節 朗
印 刷 所 旺文社 日新印刷株式会社 / 有限会社 一誠社 竹内印刷所
製 本 所 株式会社市川製本所

発 行 所 株式会社 旺 文 社
162 東京都新宿区横寺町

TEL (編集) 03-266-6374
(販売) 03-266-6415

8393 694-52 0724 E

© 大谷淳子・大谷英之 1980

08093 (許可なしに転載、複製
することを禁じます。)

Printed in Japan

大五郎は天使のはねをつけた

大谷 淳子

写真提供

大谷 英之

日本写真家協会々員。作品に、
『奇形猿は訴える』『ハクロウ病の
恐怖―山林労働者の実態』『小さな
生命―人工中絶を追って』『ある闘
い！―ハンセン氏病患者の記録』、
『訪問教師―佐藤準一先生』など
がある。

大五郎との出あい

おおたに ひでゆき
大谷英之

「奇形ザル」というものをはじめて見たのは、一九七一年、故郷の大分県に帰って高崎山にいった時だった。手のないもの、足のないもの、みんなおびえたような目をして、全身でなにかを訴えているようだった。

えづけをしている人の話では、ここ二、三年、急に目にとまるようになったという。食物に原因があるのでは——私は東京に帰っていろんな書物を調べてみた。全国に十、五、六か所ある野猿公園（苑）でも多数の奇形ザルが出ていると報告されていた。

人間が与えている食物だから人間にも……。私はそれ以来、全国各地をまわって奇形ザルの写真を撮るようになった。

そして一九七七年七月、兵庫県淡路島にいった時、重度の奇形ザルと出あった。モンキーセンターの所長、中橋さんに保護されていたものだ。仮死状態でやぶの中にころがっていたという。

「もういくらも生きられんでしょう。」

中橋さんはいった。

私はその場で、少しでも生きられるのなら家につれて帰り、記録写真を撮りたいと申し出た。中橋さんはそれを許可きょかしてくれた。さっそく手続きをすませると、その足で、東京にもどった。

体重三百グラム、身長十七センチ。後足はつけ根からまったくなし。前足はひじから少しついているだけでまがらない。まるでダルマさんのように、あわれなすがただった。

大五郎は天使のはねをつけた

一九七七年七月十五日

淡路島に写真の仕事でいつていた夫が帰ってきた。夫は地方へ出かけると、かならずその土地のおいしいものを買ってきてくれる。こんどのおみやげはなにかしらね——子どもたちとわくわくしながら、つつみをあけた私は、いっしゅん、手をひいてしまった。

さかなのひものかと思うような小動物がいた。

後足はつけねからまったくない。前足は手首まで。それもまがついてまっすぐにのびてはいない。もちろん、ゆびは一本もなかった。

「重度の奇形ザルなんだ。二、三日しか生きられないかもしれない。」
ぽつりと、夫がいった。

これまで動物はかったことがあるけれど、サルははじめて。なんとかしてやりたいけれど、こんなに死んだように動かないサルを、いったいどうあつ

かったらいいのだろう。とまどっている私に夫がいった。

「めんぼうにミルクをふくませて、のませるんだ。」

いわれた通りしてみた。しかし三十分かかって、ほんのわずかしかのんでくれない。私は必死だった。そして夜中の十二時を過ぎたころ、まるでひな鳥のように、かすかにピーピーとなくようになった。

ほつとして眠りについたのは明け方だった。

七月十八日

子ザルに、『大五郎』となまえをつけた。親がなくても子は育つ、また、親がなくても強く生きてほしいと、夫がつけたのだ。

仮死状態かしじょうたいだった大五郎は、生きかえった。

しかし、夫は、この大五郎を、どうするつもりなのだろう。



「わが家で、育てるよ。」と一こといっただけだった。

育てるといったって、わが家には三人も子どもがいるし、せまいマンションぐらしだ。それに、サルは、ことに日本サルは大小便だいしうべんのしつけができないときいている。いかにわが家の家族が動物ずきとはいっても、どうやって育てるつもりなのかしら。

七月二十四日

暑さのせいもあっていささかノイローゼぎみ。大五郎は、朝から晩まで一日中ないている。ピーピーかぼそい声で、おなかがすいた、とうったえる。ゆっくり眠ることもできない。

大五郎が、私の乳ちぶさをさぐる。からだの弱い私は、少しでもすいみんの時間がほしい。思いきって大五郎に私の乳ぶさをふくませてみた。大五郎は、

乳ぶさをくわえたまま、眠ってくれた。これで昼間はともかく、夜はらくになつた。

しかし、問題はまだある。へそのおはついているし、ひどいさかさまつげだ。そのためにも目になみだかいっぱいたまっている。

私はなやんだ。大学受験をひかえている長女の聖子せいこ。小学校三年生かすよの一世。まだ手のかかる四才よっさいの真穂まほ。そこに大五郎がくわつたのだ。にぎやかなのはすきなのだが、ときどき、いらいらしてくる。なにもしてやれなくても、せめて聖子が勉強しやすいように、静かにしてやりたい。こんなたいせつなときに、真穂よりもっと手のかかる動物をかうなんて——私は、やはり自分の子どもがかわいい。

でも、母ザルにすぎるように、私の胸で眠る大五郎をみているとあわれにもなってくる。人間の作つた公害のぎせいとなって生まれてきた大五郎にふ

れると、原爆げんばくによつてたくさんの知人や友人をうしなつた、あのときの悲しみがよみがえる。人間とサルちかの違いはあつても、生あるものの命のとうとさを、私はわすれてはいない。

やはり、大五郎は家で育てよう。私さえがんばれば、子どもたちもきつと協力してくれる。三人とも動物がすきだもの。

七月二十八日

子どもたちは、夏休み。例年どおり、とまりがけの家族旅行に出かけた。

海べから山の中にはいった、とても静かなところ。

大五郎にとってははじめての旅行だ。夜、ふとんをよごしはしないだろうか、夜なきもするのではないかと、出かける前は、心配だったが、大五郎はきげんよく子どもたちとプールのそばであそんでいる。



夫は、そんな大五郎をあきることなくおいかけて、カメラのシャッターをきっていた。

子どもたちは子どもたちで、大五郎との旅行を楽しんでいた。てのひらにのるくらいの、小さなぬいぐるみみたいな大五郎か、かわいくてしかたかないようだ。

しかし、私は、つかれた。神経しんけいをすりへらした。一年に一度の家族旅行、ゆっくりした気持ですごしたかったのに。

八月三日（広島にて）

毎年、私は子どもたちをつれてふるさとの広島へ帰ることにしている。

今年は、大五郎だいごろうがいる。どうしたものかしら。子どもたちも、広島いきをたのしみにしていることだし、帰りたい。受験をひかえて東京にのこる聖子

に大五郎をあずけていくわけにもいかないし——さんざんまよったけれど、思いきってでかけてきたのだ。ティッシュペーパーはこ、タオル二まい、バスタオル二まいなど、今年はひとり分、にもつがふえた。

新幹線しんかんせんの中で、ふるえている大五郎を私はふところの中にいれてやった。なにかおもらしが胸をつたわる。あまり気持のいいものではないけれど、しがみつくようにしている大五郎が、いとおしい。

夜おそく、広島についた。母をはじめみんな大五郎に驚おどろいたようだが、ころよくうけいれてくれる。

長い旅でつかれたのだろう、子どもたちも、大五郎もはやばやと眠ねむってしまった。